

主題	嚥下機能が低下しても経口での食事が楽しめるような多職種協働での取り組み		
副題	嚥下回数を減らすことで食事の負荷は減らすも、栄養量は落とさない ～1/2 食の提供 嚥下訓練の導入～		
嚥下機能の維持		多職種協働	
研究期間	10か月	事業所	特別養護老人ホーム 小淀ホーム
発表者：近藤雅樹(こんどう まさき)		アドバイザー：梨本恵巳(なしもと えみ)	
共同研究者：飯田範明、長久保あつ子、長島誠、上原雅人、福島令子、伊藤麗子、菅野雅一			
電 話	03-3366-6511	メール	nakano-j@nfsj.jp
FAX	03-3366-6513	URL	http://www.nfsj.jp/

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人中野区福祉サービス事業団を運営母体として平成8年に開設。特養60床、ショート4床、デイサービス、介護保険センター、地域包括支援センターを併設し、地域における福祉サービスの拠点として貢献できるよう施設運営に取り組んでいる。利用者サービスでは、これまでの排泄個別ケアに加え、口腔機能維持に着目し、食べることが楽しみに繋がる取り組みを始めている。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

高齢者の加齢に伴い、口腔機能の低下も著明に見られている中で、体重やBMIの低下など数値になって問題が現れてきた。また、加齢による摂食嚥下障害が増えていく中で、食事摂取に時間がかかることで利用者自身の嚥下状態が悪くなりむせるなど負荷がかかる他、誤嚥性肺炎や脱水等が要因とも考えられる入院者が増加した。介助職員にも誤嚥の不安感や恐怖心の増大もみられ、利用者の摂食・嚥下機能の維持に配慮した個別対応が必要であると考えた。経管栄養の利用者も含め、出来る限り食事をその方にとっての「楽しみ」の一つとして位置付けていくにはどのような支援が施設として出来るのか。

このような状況の中で日々の葛藤が生まれ、職員の意識統一と家族や嘱託医を含む多職種が一体となって取り組んでいくべき課題、「食事の負荷は減らすも、栄養量は落とさない」が浮かび上がってきた。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

2年前より多職種がグループとなって嚥下・食事摂取についての研修に参加した。研修後、施設内伝達研修等に取り組むことで、摂食支援へ取り組む下地を作ってきた。

① 経管栄養の方も含めた摂食嚥下障害のある方に対して、口腔機能維持・向上に向け取り組んだ。また、誤嚥性肺炎の予防や「経口で食べる楽しみ」からQOLの向上にも繋がられるのではないか。

② 嚥下における負荷の軽減を図ることで、利用者の誤嚥のリスクを低くし、介助者の緊張・恐怖心を減らせるのではないか。

③ 家族、嘱託医も含め多職種で取り組むことで、摂食支援における職員の意識向上と、それぞれの専門性を活かした多職種協働による連携強化に繋がられるのではないか。

《3. 具体的な取り組みの内容》

① 口腔機能体操(パタカラ体操)の実施
利用者全員を対象に、食事前(朝・昼・夕)の口腔機能体操を行う。舌の筋肉を解し、唾液の分泌を促すことで口腔機能の維持・改善を目指す。

② 食事 1/2 食の提供

「一度の食事において、嚥下回数を減らすことで食事の負担は減らすも、栄養量は落とさない」という食事提供を目指し、栄養目標値として 1250 kcal、タンパク質を 52 g と設定。主食は全量+たんぱくパウダー6 g、副食は 1/2 量で提供。補食としてたんぱくムースなどを提供していく。対象者は平成 23 年 10 月に 3 名を選定。以降、看護師、栄養士、調理員の食事介助への参加も行い、情報共有・データ管理に努めた。

③ 経口摂取訓練の導入

食べることが好きで、誤嚥性肺炎を繰り返していた利用者が胃ろうを造設した。この方を対象に、家族への説明・同意を経て経口摂取訓練を実施。第 1 段階：スポーツドリンクを浸した綿棒を凍らせ、アイスマッサージを行う(口蓋・頬裏・舌奥等を刺激して唾液の分泌を促しながら嚥下反射が蘇るように刺激していく)。第 2 段階：お茶ゼリーの経口摂取を開始し、4 か月後には 100ml をむせなく摂取できるまでに嚥下機能の向上がみられた。

その他にも摂食嚥下障害が見られる方を対象に随時カンファレンスを開催する等、多職種での情報共有と対応に努めた。

《4. 取り組みの結果と考察》

① 口腔機能体操の実施から食事意欲を高めることが出来た他、食事環境向上(レイアウト、BGM 等)に取り組むことも出来た。

② 1/2 食提供の取り組みは、現在 5 名の方を対象者としている。嚥下における利用者の負荷軽減の他、食事形態の見直しで介助に対する職員側の恐怖感の軽減も図れた。現段階で提供者は誤嚥性肺炎を要因とする医療

機関への受診・入院も回避出来ている。

③ 経口摂取訓練対象者 I 様については、ゼリー少量で食べる楽しみを取戻し、現在は食品の提供を検討中。笑顔・発語が増え、QOL の向上がみられ、職員のケアへの達成感・自信にも繋がったと言える。

今回の取り組みを通じて、その後も摂食支援についての意識が施設全体で高まっている。嚥下機能に配慮した個別対応は多職種協働で取り組むことが不可欠であり、対応も見出すことが出来た。これからも、日々浮かび上がってくる課題に対する取り組みについても、今回の取り組みから得たスキルを反映させ、更なるチームケアの確立に臨みたい。

《5. まとめ、結論》

その方の状態に見合った対応を多職種で取り組むことがリスク回避、栄養状態の維持に留まらず「楽しみ」に繋がられるのではないだろうか。今後の更なる取り組み課題として今回の方法をベースとして安全で楽しみとなる新たな食事提供方法を多職種で協働し、模索していきたい。

《6. 参考文献》

『図解介護のための口腔ケア』

菊谷武著 講談社

『かむ・のみこむが困難な人の食事』

改訂新版 菊谷武、山田晴子、赤堀博美著
女子栄養大学出版社

《7. 提案と発信》

摂食嚥下障害の方の増加については、どの施設においても避けられない状況ではないだろうか。そのような中で、経口摂取の限界にのみ視点を置くのではなく、どのような摂食支援を行えばその人らしい「食べる楽しみ」を持てるのかという取り組みを多職種で行うことが自立支援にも繋がるのではないかと考える。

【メモ欄】